

CHAPTER 27

「『占い学』をやめなきゃよかったって、いま、きっとそう思ってるでしょう？ ハーマイオニー？」

パーパティがにんまり笑いながら開いた。トレローニー先生解雇の二日後の朝食のときだった。

パーパティは睫毛を杖に巻きつけてカールし、仕上がり具合をスプーンの裏に映して確かめていた。

午前中にフィレンツェの最初の授業があることになっていた。

「そうでもないわ」ハーマイオニーは「日刊予言者」を読みながら、興味なさそうに答えた。

「もともと馬はあんまり好きじゃないの」ハーマイオニーは新聞を捲り、コラム欄にざっと目を通した。

「あの人は馬じゃないわ。ケンタウルスよ！」ラベンダーがショックを受けたような声をあげた。

「目の覚めるようなケンタウルスだわ……」パーパティがため息をついた。

「どっちにしろ、脚は四本あるわ」ハーマイオニーが冷たく言った。

「ところで、あなたたち二人は、トレローニーがいなくなってがっかりしてると思ったけど？」

「してるわよ！」ラベンダーが強調した。

「私たち、先生の部屋を訪ねたの。ラッパ水仙を持ってねースプラウト先生が育てているラッパを吹き鳴らすやつじゃなくて、きれいな水仙をよ」

「先生、どうしてる？」ハリーが聞いた。

「おかawaiiそうに、あまりよくないわ」ラベンダーが気の毒そうに言った。

「泣きながら、アンブリッジがいるこの城にいるより、むしろ永久に去ってしまいたいわ。無理もないわ。アンブリッジが、先生にひどいことをしたんですもの」

「あの程度のひどさはまだ序の口だという感じがするわ」ハーマイオニーが暗い声を出した。

「ありえないよ」ロンは大皿盛りの卵とベー

Chapter 27

The Centaur and The Sneak

“I’ll bet you wish you hadn’t given up Divination now, don’t you, Hermione?” asked Parvati, smirking.

It was breakfast time a few days after the sacking of Professor Trelawney, and Parvati was curling her eyelashes around her wand and examining the effect in the back of her spoon. They were to have their first lesson with Firenze that morning.

“Not really,” said Hermione indifferently, who was reading the *Daily Prophet*. “I’ve never really liked horses.”

She turned a page of the newspaper, scanning its columns.

“He’s not a horse, he’s a centaur!” said Lavender, sounding shocked.

“A *gorgeous* centaur ...” sighed Parvati.

“Either way, he’s still got four legs,” said Hermione coolly. “Anyway, I thought you two were all upset that Trelawney had gone?”

“We are!” Lavender assured her. “We went up to her office to see her, we took her some daffodils — not the honking ones that Sprout’s got, nice ones. ...”

“How is she?” asked Harry.

“Not very good, poor thing,” said Lavender sympathetically. “She was crying and saying she’d rather leave the castle forever than stay here if Umbridge is still here, and I don’t blame her. Umbridge was horrible to her, wasn’t she?”

“I’ve got a feeling Umbridge has only just

コンに食らいつきながら言った。

「あの女、これ以上悪くなりようがないだろ」

「まあ、見てらっしゃい。ダンブルドアが相談もなしに新しい先生を任命したことで、あの人の人、仕返しに出るわ」ハーマイオニーは新聞を閉じた。

「しかも任命したのがまたしても半人間。フィレンツェを見たときの、あの人の顔、見たでしょう？」

朝食の後、ハーマイオニーは「数占い」のクラスへ、ハリーとロンはパーパティとラベンダーに続いて玄関ホールに行き、「占い学」に向かった。

「北塔に行くんじゃないのか？」

パーパティが大理石の階段を通り過ぎてしまったので、ロンが怪訝そうな顔をした。パーパティは振り向いて、叱りつけるような目でロンを見た。

「フィレンツェがああ梯子階段を昇れると思うの？ 十一番教室になったのよ。昨日、掲示板に貼ってあったわ」

十一番教室は一階で、玄関ホールから大広間とは逆の方向に行く廊下沿いにあった。ハリーは、この教室が、定期的に使われていない部屋の一つだということを知っていた。そのため、納戸や倉庫のような、なんとなく放ったらかしの感じがする部屋だ。ロンのすぐあとから教室に入ったハリーは、一瞬ポカンとした。そこは森の空き地の真ただ中だった。

「これはいったい――？」

教室の床は、ふかふかと苔むして、そこから樹木が生えていた。

こんもりと繁った葉が、天井や窓に広がり、部屋中に柔らかな緑の光の筋が何本も斜めに射し込み、光のまだら模様を描いていた。先に来ていた生徒たちは、土の感触がする床に座り込み、木の幹や、大きな石にもたれ掛かって、両腕で膝を抱えたり、胸の上で固く腕組みしたくして、ちょっと不安そうな顔をしていた。空き地の真ん中には立ち木がなく、フィレンツェが立っていた。

「ハリー ポッター」ハリーが入っていくと、フィレンツェが手を差し出した。

started being horrible,” said Hermione darkly.

“Impossible,” said Ron, who was tucking into a large plate of eggs and bacon. “She can’t get any worse than she’s been already.”

“You mark my words, she’s going to want revenge on Dumbledore for appointing a new teacher without consulting her,” said Hermione, closing the newspaper. “Especially another part-human. You saw the look on her face when she saw Firenze. ...”

After breakfast Hermione departed for her Arithmancy class and Harry and Ron followed Parvati and Lavender into the entrance hall, heading for Divination.

“Aren’t we going up to North Tower?” asked Ron, looking puzzled, as Parvati bypassed the marble staircase.

Parvati looked scornfully over her shoulder at him.

“How d’you expect Firenze to climb that ladder? We’re in classroom eleven now, it was on the notice board yesterday.”

Classroom eleven was situated in the ground-floor corridor leading off the entrance hall on the opposite side to the Great Hall. Harry knew it to be one of those classrooms that were never used regularly, and that it therefore had the slightly neglected feeling of a cupboard or storeroom. When he entered it right behind Ron, and found himself right in the middle of a forest clearing, he was therefore momentarily stunned.

“What the — ?”

The classroom floor had become springily mossy and trees were growing out of it; their leafy branches fanned across the ceiling and windows, so that the room was full of slanting shafts of soft, dappled, green light. The

「あーやあ」ハリーは握手した。
ケンタウルスは驚くほど青い目で、瞬きもせずハリーを観察していたが、笑顔は見せなかった。

「あーまた会えてうれしいです」
「こちらこそ」ケンタウルスは銀白色の頭を軽く傾けた。

「また会うことは、予言されていました」
ハリーは、フィレンツェの胸にうっすらと馬蹄形の打撲傷があるのに気づいた。
地面に座っている他の生徒たちのところに行こうとすると、みんなが一斉にハリーに尊敬の眼差しを向けていた。

どうやら、みんなが怖いと思っているフィレンツェと、ハリーが言葉を交わす間柄だということに、ひどく感心したらしい。

ドアが閉まり、最後の生徒がクズ籠の脇の切株に腰を下ろすと、フィレンツェがぐると部屋を見渡した。

「ダンブルドア先生のご厚意で、この教室が準備されました」生徒全員が落ち着いたところで、フィレンツェが言った。

「私の棲息地に似せてあります。できれば禁じられた森で授業をしたかったのです。そこが——この月曜日までは——私の住いででした……しかし、もはやそれはかないません」

「あの——え——先生——」パーパティが手を挙げ、息を殺して尋ねた。

「どうしてですか？ 私たち、ハグリッドと一緒にあの森に入ったことがあります。怖くありません！」

「君たちの勇気が問題なのではありません」フィレンツェが言った。

「私の立場の問題です。私はもはやあの森に戻ることができません。群れから追放されたのです」

「群れ？」ラベンダーが困惑した声を出した。

ハリーは、牛の群れを考えているのだろうと思った。

「なんです——あっ！」わかったという表情がパッと広がった。

「先生の仲間がもっといるのですね？」ラベンダーがびっくりしたように言った。

「ハグリッドが繁殖させたのですか？ セスト

students who had already arrived were sitting on the earthy floor with their backs resting against tree trunks or boulders, arms wrapped around their knees or folded tightly across their chests, looking rather nervous. In the middle of the room, where there were no trees, stood Firenze.

“Harry Potter,” he said, holding out a hand when Harry entered.

“Er — hi,” said Harry, shaking hands with the centaur, who surveyed him unblinkingly through those astonishingly blue eyes but did not smile. “Er — good to see you ...”

“And you,” said the centaur, inclining his white-blond head. “It was foretold that we would meet again.”

Harry noticed that there was the shadow of a hoof-shaped bruise on Firenze’s chest. As he turned to join the rest of the class upon the floor, he saw that they were all looking at him with awe, apparently deeply impressed that he was on speaking terms with Firenze, whom they seemed to find intimidating.

When the door was closed and the last student had sat down upon a tree stump beside the wastepaper basket, Firenze gestured around the room.

“Professor Dumbledore has kindly arranged this classroom for us,” said Firenze, when everyone had settled down, “in imitation of my natural habitat. I would have preferred to teach you in the Forbidden Forest, which was — until Monday — my home ... but this is not possible.”

“Please — er — sir —” said Parvati breathlessly, raising her hand, “why not? We’ve been in there with Hagrid, we’re not frightened!”

ラルみたいに？」ディーンが興味津々で聞いた。

フィレンツェの頭がゆっくりと回り、ディーンの顔を直視した。

ディーンはすぐさま、何かとても気に障ることを言ってしまったと気づいたらしい。

「そんなつもりでは——つまり——すみません」最後は消え入るような声だった。

「ケンタウルスはヒト族の召し使いでも、慰み者でもない」フィレンツェが静かに言った。

しばらく間が空いた。それから、パーパティがもう一度しっかり手を挙げた。

「あの、先生……どうしてほかのケンタウルスが先生を追放したのですか？」

「それは、私がダンブルドアのために働くのを承知したからです」フィレンツェが答えた。

「仲間は、これが我々の種族を裏切るものと見ています」ハリーはもうかれこれ四年前のことを思い出していた。

フィレンツェがハリーを背中に乗せて安全なところまで運んだことで、ケンタウルスのペインがフィレンツェを怒鳴りつけ、「ただのロバ」呼ばわりした。

ハリーは、もしかしたら、フィレンツェの胸を蹴ったのはペインではないかと思った。

「では始めよう」そう言うと、フィレンツェは、長い黄金色の尻尾をひと振りし、頭上のこんもりした天蓋に向けて手を伸ばし、その手をゆっくりと下ろした。

すると、部屋の明かりが徐々に弱まり、まるで夕暮れどきに森の空き地に座っているような様子になった。

天井に星が現れ、あちこちで「オーッ」と言う声や、息を呑む音がした。

ロンは声に出して「おっどろきー！」と言った。

「床に仰向けに寝転んで」フィレンツェがいつもの静かな声で言った。

「天空を観察してください。見る目を持った者にとっては、我々の種族の運命がここに書かれているのです」

ハリーは仰向けになって伸びをし、天井を見つめた。

“It is not a question of your bravery,” said Firenze, “but of my position. I can no longer return to the forest. My herd has banished me.”

“Herd?” said Lavender in a confused voice, and Harry knew she was thinking of cows. “What — oh!” Comprehension dawned on her face. “There are *more of you*?” she said, stunned.

“Did Hagrid breed you, like the thestrals?” asked Dean eagerly.

Firenze turned his head very slowly to face Dean, who seemed to realize at once that he had said something very offensive.

“I didn’t — I meant — sorry,” he finished in a hushed voice.

“Centaurus are not the servants or playthings of humans,” said Firenze quietly. There was a pause, then Parvati raised her hand again.

“Please, sir ... why have the other centaurs banished you?”

“Because I have agreed to work for Professor Dumbledore,” said Firenze. “They see this as a betrayal of our kind.”

Harry remembered how, nearly four years ago, the centaur Bane had shouted at Firenze for allowing Harry to ride to safety upon his back, calling him a “common mule.” He wondered whether it had been Bane who had kicked Firenze in the chest.

“Let us begin,” said Firenze. He swished his long palomino tail, raised his hand toward the leafy canopy overhead then lowered it slowly, and as he did so, the light in the room dimmed, so that they now seemed to be sitting in a forest clearing by twilight, and stars emerged upon the ceiling. There were *oohs* and gasps, and Ron said audibly, “Blimey!”

“Lie back upon the floor,” said Firenze in

キラキラ輝く赤い星が、上からハリーに瞬いた。

「みなさんは、『天文学』で惑星やその衛星の名前を勉強しましたね」

フィレンツェの静かな声が続いた。

「そして、天空を巡る星の運行図を作りましたね。ケンタウルスは、何世紀もかけて、こうした天体の動きの神秘を解き明かしてきました。その結果、天空に未来が顔を覗かせる可能性があることを知ったのですー」

「トレローニー先生は占星術を教えてくださいましたわ！」パーパティが興奮して言った。寝転んだまま手を前に出したので、その手が空中に突き出した。

「火星は事故とか、火傷とか、そういうものを引き起こし、その星が、土星とちょうどいまみたいな角度を作っているときー」パーパティは空中に直角を描いた。

「それは、熱いものを扱う場合、とくに注意が必要だということを意味するの」

「それは」

フィレンツェが静かに言った。

「ヒトのバカげた考えです」

パーパティの手が力なく落ちて体の脇に収まった。

「些細な怪我や人間界の事故など」フィレンツェは蹄で苔むした床を強く踏み鳴らしながら、話し続けた。

「そうしたものは、広大な宇宙にとって、忙しく這い回る蟻ほどの意味しかなく、惑星の動きに影響されるようなものではありません」

「トレローニー先生はー」パーパティが傷ついて憤慨した声で何か言おうとした。

「ヒトです」フィレンツェがさりと言った。

「だからこそ、みなさんの種族の限界のせいで、視野が狭く、束縛されているのです」ハリーは首をほんの少し捻って、パーパティを見た。腹を立てているようだった。パーパティの周りにいる何人かの生徒も同じだった。

「シビル　トレローニーは『予見』したことがあるかもしれませんが。私にはわかりませんが」

his calm voice, “and observe the heavens. Here is written, for those who can see, the fortune of our races.”

Harry stretched out on his back and gazed upward at the ceiling. A twinkling red star winked at him from overhead.

“I know that you have learned the names of the planets and their moons in Astronomy,” said Firenze’s calm voice, “and that you have mapped the stars’ progress through the heavens. Centaurs have unraveled the mysteries of these movements over centuries. Our findings teach us that the future may be glimpsed in the sky above us. ...”

“Professor Trelawney did Astrology with us!” said Parvati excitedly, raising her hand in front of her so that it stuck up in the air as she lay on her back. “Mars causes accidents and burns and things like that, and when it makes an angle to Saturn, like now” — she drew a right angle in the air above her — “that means that people need to be extra careful when handling hot things —”

“That,” said Firenze calmly, “is human nonsense.”

Parvati’s hand fell limply to her side.

“Trivial hurts, tiny human accidents,” said Firenze, as his hooves thudded over the mossy floor. “These are of no more significance than the scurryings of ants to the wide universe, and are unaffected by planetary movements.”

“Professor Trelawney —” began Parvati, in a hurt and indignant voice.

“— is a human,” said Firenze simply. “And is therefore blinkered and fettered by the limitations of your kind.”

Harry turned his head very slightly to look at Parvati. She looked very offended, as did

フィレンツェは話し続け、生徒の前を往ったり来たりしながら尻尾をシュッと振る音が、ハリーの耳に入った。

「しかしあの方は、ヒトが予言と呼んでいる、自己満足の戯言に、大方の時間を浪費している。私は、個人的なものや偏見を離れた、ケンタウルの叡智を説明するためにここにいるのです。我々が空を眺めるのは、そこに時折記されている、邪悪なものや変化の大きな潮流を見るためです。我々がいま見ているものが何であるかがはっきりするまでに、十年もの歳月を要することがあります」フィレンツェはハリーの真上の赤い星を指差した。

「この十年間、魔法界が、二つの戦争の合間の、ほんのわずかな静けさを生きているにすぎないと印されていました。戦いをもたらす火星が、我々の頭上に明るく輝いているのは、まもなく再び戦いが起こるであろうことを示唆しています。どのくらい差し迫っているかを、ケンタウルスはある種の薬草や木の葉を燃やし、その炎や煙を読むことで占おうとします……」

これまでハリーが受けた中で、一番風変わりな授業だった。

みんなが実際に教室の床の上でセージやゼニアオイを燃やした。

フィレンツェはつんと刺激臭のある煙の中に、ある種の形や徴を探すように教えたが、誰もフィレンツェの説明する印を見つけることができなくともまったく意に介さないようだった。

ヒトはこういうことが得意だった例がないし、ケンタウルスも能力を身につけるまでに長い年月がかかっていると言い、最後には、いずれにせよ、こんなことを信用しすぎるのは愚かなことだ、ケンタウルスでさえ時には読み違えるのだから、と締め括った。

ハリーがいままで習ったヒトの先生とはまるで違っていた。

フィレンツェにとって大切なのは、自分の知っていることを教えることではなく、むしろ、何事も、ケンタウルの叡智でさえ、絶対に確実なものなどないのだと生徒に印象づけることのようにだった。

several of the people surrounding her.

“Sibyll Trelawney may have Seen, I do not know,” continued Firenze, and Harry heard the swishing of his tail again as he walked up and down before them, “but she wastes her time, in the main, on the self-flattering nonsense humans call fortune-telling. I, however, am here to explain the wisdom of centaurs, which is impersonal and impartial. We watch the skies for the great tides of evil or change that are sometimes marked there. It may take ten years to be sure of what we are seeing.”

Firenze pointed to the red star directly above Harry.

“In the past decade, the indications have been that Wizard-kind is living through nothing more than a brief calm between two wars. Mars, bringer of battle, shines brightly above us, suggesting that the fight must break out again soon. How soon, centaurs may attempt to divine by the burning of certain herbs and leaves, by the observation of fume and flame. ...”

It was the most unusual lesson Harry had ever attended. They did indeed burn sage and mallowsweet there on the classroom floor, and Firenze told them to look for certain shapes and symbols in the pungent fumes, but he seemed perfectly unconcerned that not one of them could see any of the signs he described, telling them that humans were hardly ever good at this, that it took centaurs years and years to become competent, and finished by telling them that it was foolish to put too much faith in such things anyway, because even centaurs sometimes read them wrongly. He was nothing like any human teacher Harry had ever had. His priority did not seem to be to teach them what he knew, but rather to impress upon them that nothing, not even centaurs’

「フィレンツェは何にも具体的じゃないね？」ゼニアオイの火を消しながら、ロンが低い声で言った。

「だってさ、これから起ころうとしている戦いについて、もう少し詳しいことが知りたいよな？」

終業ベルが教室のすぐ外で鳴り、みんな飛び上がった。

ハリーは、自分たちがまだ城の中にいることをすっかり忘れて、本当に森の中にいると思ひ込んでいた。

みんな少しぼーっとしながら、ぞろぞろと教室を出ていった。

ハリーとロンも列に並ぼうとしたとき、フィレンツェが呼び止めた。

「ハリー ポッター、ちょっとお話があります」

ハリーが振り向き、ケンタウルスが少し近づいてきた。ロンはもじもじした。

「あなたもいていいですよ」フィレンツェが言った。

「でも、ドアを閉めてください」ロンが急いで言われたとおりにした。

「ハリー ポッター、あなたはハグリッドの友人ですね？」ケンタウルスが聞いた。

「はい」ハリーが答えた。

「それなら、私からの忠告を伝えてください。ハグリッドがやろうとしていることは、うまくいきません。放棄するほうがいいのです」

「やろうとしていることが、うまくいかない？」ハリーはポカンとしで繰り返した。

「それに、放棄するほうがいい、と」フィレンツェが頷いた。

「私が自分でハグリッドに忠告すればいいのですが、追放の身ですから——いま、あまり森に近づくのは賢明ではありません——ハグリッドは、この上ケンタウルス同士の戦いまで抱え込む余裕はありません」

「でも——ハグリッドは何をしようとしているの？」ハリーが不安そうに聞いた。

フィレンツェは無表情にハリーを見た。

「ハグリッドは最近、私にとってもよくしてくださった。それに、すべての生き物に対するあの人の愛情を、私はずっと尊敬していまし

knowledge, was foolproof.

“He’s not very definite on anything, is he?” said Ron in a low voice, as they put out their mallowsweet fire. “I mean, I could do with a few more details about this war we’re about to have, couldn’t you?”

The bell rang right outside the classroom door and everyone jumped; Harry had completely forgotten that they were still inside the castle, quite convinced that he was really in the forest. The class filed out, looking slightly perplexed; Harry and Ron were on the point of following them when Firenze called, “Harry Potter, a word, please.”

Harry turned. The centaur advanced a little toward him. Ron hesitated.

“You may stay,” Firenze told him. “But close the door, please.”

Ron hastened to obey.

“Harry Potter, you are a friend of Hagrid’s, are you not?” said the centaur.

“Yes,” said Harry.

“Then give him a warning from me. His attempt is not working. He would do better to abandon it.”

“His attempt is not working?” Harry repeated blankly.

“And he would do better to abandon it,” said Firenze, nodding. “I would warn Hagrid myself, but I am banished — it would be unwise for me to go too near the forest now — Hagrid has troubles enough, without a centaurs’ battle.”

“But — what’s Hagrid attempting to do?” said Harry nervously.

Firenze looked at Harry impassively.

た。あの人の秘密を明かすような不実はしません。しかし、誰かがハグリッドの目を覚まさせなければなりません。あの試みはうまくいきません。そう伝えてください、ハリーポッター。ではご機嫌よう」

「ザクイブラー」のインタビューがもたらした幸福感は、とくに雲散霧消していた。どんよりした三月がいつの間にか風の激しい四月に変わり、ハリーの生活は、再び途切れることのない心配と問題の連続になっていた。

アンブリッジは引き続き毎回「魔法生物飼育学」の授業に来ていたので、フィレンツェの警告をハグリッドに伝えるのはなかなか難しかった。

やっと、ある日、「幻の動物とその生息地」の本を忘れてきたふりをして、ハリーは、授業が終わってからハグリッドのところへ引き返した。

フィレンツェの伝言を伝えると、ハグリッドは一瞬、腫れ上がって黒い痣になった目で、ぎょっとしたようにハリーを見つめた。やがて、なんとか気を取り戻したらしい。

「いいやつだ、フィレンツェは」ハグリッドがぶっきらぼうに言った。

「だが、このことに関しちゃあ、あいつはなんにもわかってねえ。あのことは、ちゃんとうまくいっちょる」

「ハグリッド、いったい何をやってるんだい？」ハリーは真剣に聞いた。

「だって、気をつけないといけないよ。アンブリッジはもうトレローニーをクビにしたんだ。僕が見るところ、あいつは勢いづいてる。ハグリッドが、何かやっちゃいけないようなことしてるんだったら、きっと——」

「世の中にゃ、職を守るよりも大切なことがある」そう言いながらも、ハグリッドの両手が微かに震え、ナールの糞で一杯の桶を床に取り落とした。

「俺のことは心配するな、ハリー。さあ、もう行け、いい子だから」

床一杯に散らばった糞を掃き集めているハグリッドを残して、ハリーはそこを去るしかな

“Hagrid has recently rendered me a great service,” said Firenze, “and he has long since earned my respect for the care he shows all living creatures. I shall not betray his secret. But he must be brought to his senses. The attempt is not working. Tell him, Harry Potter. Good day to you.”

The happiness Harry had felt in the aftermath of *The Quibbler* interview had long since evaporated. As a dull March blurred into a squally April, his life seemed to have become one long series of worries and problems again.

Umbridge had continued attending all Care of Magical Creatures lessons, so it had been very difficult to deliver Firenze’s warning to Hagrid. At last Harry had managed it by pretending he had lost his copy of *Fantastic Beasts and Where to Find Them* and doubling back after class one day. When he passed on Firenze’s message, Hagrid gazed at him for a moment through his puffy, blackened eyes, apparently taken aback. Then he seemed to pull himself together.

“Nice bloke, Firenze,” he said gruffly, “but he don’ know what he’s talkin’ abou’ on this. The attemp’s comin’ on fine.”

“Hagrid, what’re you up to?” asked Harry seriously. “Because you’ve got to be careful, Umbridge has already sacked Trelawney and if you ask me, she’s on a roll. If you’re doing anything you shouldn’t be ——”

“There’s things more importan’ than keepin’ a job,” said Hagrid, though his hands shook slightly as he said this and a basin full of knarl droppings crashed to the floor. “Don’ worry abou’ me, Harry, jus’ get along now, there’s a good lad. ...”

Harry had no choice but to leave Hagrid

かった。

しかし、がっかり気落ちして、城に戻る足取りは重かった。

一方、先生方もハーマイオニーも口を酸っぱくしてハリーたちに言い聞かせていたが、試験がだんだん迫っていた。

五年生全員が、多かれ少なかれストレスを感じていたが、まず、ハンナ アボットが音をあげた。

「薬草学」の授業中に突然泣き出し、自分の頭では試験は無理だから、いまずぐ学校を辞めたいと泣きじゃくって、マダム ポンフリーの「鎮静水薬」を飲まされる第一号になったのだ。

D Aがなかったら、自分はどんなに惨めだったろうと、ハリーは思った。

「必要の部屋」で過ごす数時間のために生きているように感じることもあった。

きつい練習だったが、同時に楽しくてしかたがなかった。

D Aのメンバーを見回し、みんながどんなに進歩したかを見るたびに、ハリーは誇りで胸が一杯になった。

O W L試験の「闇の魔術に対する防衛術」で、D Aのメンバーが全員「O 優」を取ったら、アンブリッジがどんな顔をするだろうと、時々本気でそう考えることがあった。

D Aでは、ついに「守護霊」の練習を始めた。

みんなが練習したくてたまらなかった術だ。しかし、守護霊を創り出すといっても、明るい照明の教室でなんの脅威も感じないときと、吸魂鬼のようなものと対決しているときとでは、まったく違うのだと、ハリーは繰り返し説明した。

「まあ、そんな興ざめなこと言わないで」イースター休暇前の最後の練習で、自分が創り出した銀色の白鳥の形をした守護霊が「必要の部屋」をふわふわ飛び回るのを眺めながら、チョウが朗らかに言った。

「とってもかわいいわ!」

「かわいいんじゃない困るよ。君を守護するはずなんだから」ハリーが辛抱強く言った。

「本当は、まね妖怪か何かが必要だ。僕はそうやって学んだんだから。まね妖怪が吸魂鬼

mopping up the dung all over his floor, but he felt thoroughly dispirited as he trudged back up to the castle.

Meanwhile, as the teachers and Hermione persisted in reminding them, the O.W.L.s were drawing ever nearer. All the fifth years were suffering from stress to some degree, but Hannah Abbott became the first to receive a Calming Draught from Madam Pomfrey after she burst into tears during Herbology and sobbed that she was too stupid to take exams and wanted to leave school now.

If it had not been for the D.A. lessons, Harry thought he would have been extremely unhappy. He sometimes felt that he was living for the hours he spent in the Room of Requirement, working hard but thoroughly enjoying himself at the same time, swelling with pride as he looked around at his fellow D.A. members and saw how far they had come. Indeed, Harry sometimes wondered how Umbridge was going to react when all the members of the D.A. received “Outstanding” in their Defense Against the Dark Arts O.W.L.s.

They had finally started work on Patronuses, which everybody had been very keen to practice, though as Harry kept reminding them, producing a Patronus in the middle of a brightly lit classroom when they were not under threat was very different to producing it when confronted by something like a dementor.

“Oh, don’t be such a killjoy,” said Cho brightly, watching her silvery swan-shaped Patronus soar around the Room of Requirement during their last lesson before Easter. “They’re so pretty!”

“They’re not supposed to be pretty, they’re supposed to protect you,” said Harry patiently.

のふりをしている間に、なんとかして守護霊を創り出さなきゃならなかったんだー」

「だけど、そんなの、とっても怖いじゃない！」ラベンダーの杖先から銀色の煙がポッと噴き出していた。

「それに、私まだーうまくー出せないのよ！」ラベンダーは怒ったように言った。ネビルも苦労していた。

顔を歪めて集中しても、杖先からは細い銀色の煙がヒョロヒョロと出てきただけだった。

「何か幸福なことを思い浮かべないといけないんだよ」ハリーが指導した。

「そうしてるんだけど」ネビルが、惨めな声で言った。

本当に一所懸命で、丸顔が汗で光っていた。

「ハリー、僕、できたと思う！」ディーンに連れられて、D Aに初めて参加したシェーマスが叫んだ。

「見てーあー消えた……だけど、ハリー、たしかに何か毛むくじゃらなやつだったぜ！」

ハーマイオニーの守護霊は、銀色に光るカワウソで、ハーマイオニーの周りを跳ね回っていた。

「ほんとに、ちょっと素敵じゃない？」ハーマイオニーは、自分の守護霊を愛おしそうに眺めていた。

「必要の部屋」のドアが開いて、閉まった。ハリーは誰が来たのだろうと振り返ったが、誰もいないようだった。

しばらくして、ハリーは、ドア近くの生徒たちがひっそりとなったのに気づいた。

すると、何かが膝のあたりで、ハリーのローブを引っ張った。

見下ろすと、驚いたことに、屋敷しもべ妖精のドビーが、いつもの八段重ねの毛糸帽の下から、ハリーをじっと見上げていた。

「やあ、ドビー」ハリーが声をかけた。

「何しにーどうかしたのかい？」

妖精は恐怖で目を見開きへ震えていた。ハリーの近くにいたD Aのメンバーが黙り込んだ。

部屋中がドビーを見つめている。何人かがやっと創り出した数少ない守護霊も、銀色の霞となって消え、部屋は前よりもずっと暗くな

“What we really need is a boggart or something; that’s how I learned, I had to conjure a Patronus while the boggart was pretending to be a dementor —”

“But that would be really scary!” said Lavender, who was shooting puffs of silver vapor out of the end of her wand. “And I still — can’t — do it!” she added angrily.

Neville was having trouble too. His face was screwed up in concentration, but only feeble wisps of silver smoke issued from his wand tip.

“You’ve got to think of something happy,” Harry reminded him.

“I’m trying,” said Neville miserably, who was trying so hard his round face was actually shining with sweat.

“Harry, I think I’m doing it!” yelled Seamus, who had been brought along to his first ever D.A. meeting by Dean. “Look — ah — it’s gone. ... But it was definitely something hairy, Harry!”

Hermione’s Patronus, a shining silver otter, was gamboling around her.

“They *are* sort of nice, aren’t they?” she said, looking at it fondly.

The door of the Room of Requirement opened and then closed again; Harry looked around to see who had entered, but there did not seem to be anybody there. It was a few moments before he realized that the people close to the door had fallen silent. Next thing he knew, something was tugging at his robes somewhere near the knee. He looked down and saw, to his very great astonishment, Dobby the house-elf peering up at him from beneath his usual eight hats.

“Hi, Dobby!” he said. “What are you —

った。

「ハリー ポッターさま……」妖精は頭から爪先までブルブル震えながら、キーキー声を出した。

「ハリー ポッターさま……ドビーめはご注進に参りました……でも、屋敷しもべ妖精というものは、しゃべってはいけないと戒められてきました……」

ドビーは壁に向かって頭を突き出して走り出した。

ドビーの自分自身を処罰する習性について経験済みだったハリーは、ドビーを取り押さえようとした。

しかし、ドビーは、八段重ねの帽子がクッションになって、石壁から跳ね返っただけだった。

ハーマイオニーや他の数人の女の子が、恐怖と同情心で悲鳴をあげた。

「ドビー、いったい何があったの？」妖精の小さい腕をつかみ、自傷行為に走りそうな物からいっさい遠ざけて、ハリーが聞いた。

「ハリー ポッター……あの人が……あの女の子の人が……」

ドビーは捕まえられていないほうの手を拳にして、自分の鼻を思い切り殴った。

ハリーはそっちの手も押さえた。

「あの人って、ドビー、誰？」しかし、ハリーはわかったと思った。

ドビーをこんなに恐れさせる女性は、一人しかいないではないか。

妖精は、少しくくらした目でハリーを見上げ、口の動きだけで伝えた。

「アンブリッジ？」ハリーはぞっとした。

ドビーが頷いた。

そして、ハリーの膝に頭を打ちつけようとした。

ハリーは、両腕をいっぱい伸ばして、ドビーを腕の長さ分だけ遠ざけた。

「アンブリッジがどうかしたの？ ドビー——このことはあの人にバレてないだろ。……僕たちのことも——D.A.のことも？」ハリーはその答えを、打ちのめされたようなドビーの顔に読み取った。

両手をしっかりハリーに押さえられているので、ドビーは自分を蹴飛ばそうとして、がく

what's wrong?"

For the elf's eyes were wide with terror and he was shaking. The members of the D.A. closest to Harry had fallen silent now: Everybody in the room was watching Dobby. The few Patronuses people had managed to conjure faded away into silver mist, leaving the room looking much darker than before.

"Harry Potter, sir ..." squeaked the elf, trembling from head to foot, "Harry Potter, sir ... Dobby has come to warn you ... but the house-elves have been warned not to tell ..."

He ran headfirst at the wall: Harry, who had some experience of Dobby's habits of self-punishment, made to seize him, but Dobby merely bounced off the stone, cushioned by his eight hats. Hermione and a few of the other girls let out squeaks of fear and sympathy.

"What's happened, Dobby?" Harry asked, grabbing the elf's tiny arm and holding him away from anything with which he might seek to hurt himself.

"Harry Potter ... she ... she ..."

Dobby hit himself hard on the nose with his free fist: Harry seized that too.

"Who's 'she,' Dobby?"

But he thought he knew — surely only one "she" could induce such fear in Dobby? The elf looked up at him, slightly cross-eyed, and mouthed wordlessly.

"Umbridge?" asked Harry, horrified.

Dobby nodded, then tried to bang his head off Harry's knees; Harry held him at bay.

"What about her? Dobby — she hasn't found out about this — about us — about the D.A.?"

He read the answer in the elf's stricken face.

りと膝をついてしまった。

「あの女が来るのか？」ハリーが静かに聞いた。ドビーは喚き声をあげた。

「そうです。ハリー ポッター、そうです！」

ハリーは体を起こし、じたばたする妖精を見つめて身動きもせず戦っている生徒たちを見回した。

「何をぐずぐずしてるんだ！」ハリーが声を張りあげた。

「逃げろ！」

全員が一斉に出口に突進した。

ドアのところでごった返し、それから破裂したように出ていった。

廊下を疾走する音を聞きながら、ハリーは、みんなが分別をつけて、寮まで一直線に戻ろうなんてバカなことを考えなければいいかと願った。

いま、九時十分前だ。

図書室とか、ふくろう小屋とか、ここから近いところに避難してくれば。

「ハリー、早く！」外に出ようと揉み合っている群れの真ん中から、ハーマイオニーが叫んだ。

ハリーは、自分をこっぴどく傷つけようとしてまだもがいているドビーを抱え上げ、列の後ろにつこうと、ドビーを腕に走りだした。

「ドビー——これは命令だ——厨房に戻って、妖精の仲間と一緒にいるんだ。もしアンブリッジが、僕に警告したのかと聞いたら、嘘をついて、『ノー』と答えるんだぞ！」ハリーが言った。

「それに、自分を傷つけることは、僕が禁ずる！」やっと出口に辿り着き、ハリーはドビーを下ろ

してドアを閉めた。

「ありがとう、ハリー ポッター！」ドビーはキーキー言うと、超スピードで走り去った。

ハリーは左右に目を走らせた。

全員が一目散に走っていたので、廊下の両端に、宙を飛ぶ踵がちらりと見えたと思ったら、すぐに消え去った。

ハリーは右に走りだした。その先に男子トイレがある。ずっとそこに入っていたふりをし

His hands held fast by Harry, the elf tried to kick himself and fell to the floor.

“Is she coming?” Harry asked quietly.

Dobby let out a howl, and began beating his bare feet hard on the floor. “Yes, Harry Potter, yes!”

Harry straightened up and looked around at the motionless, terrified people gazing at the thrashing elf.

“WHAT ARE YOU WAITING FOR?” Harry bellowed. “RUN!”

They all pelted toward the exit at once, forming a scrum at the door, then people burst through; Harry could hear them sprinting along the corridors and hoped they had the sense not to try and make it all the way to their dormitories. It was only ten to nine, if they just took refuge in the library or the Owlery, which were both nearer —

“Harry, come on!” shrieked Hermione from the center of the knot of people now fighting to get out.

He scooped up Dobby, who was still attempting to do himself serious injury, and ran with the elf in his arms to join the back of the queue.

“Dobby — this is an order — get back down to the kitchen with the other elves, and if she asks you whether you warned me, lie and say no!” said Harry. “And I forbid you to hurt yourself!” he added, dropping the elf as he made it over the threshold at last and slamming the door behind him.

“Thank you, Harry Potter!” squeaked Dobby, and he streaked off. Harry glanced left and right, the others were all moving so fast that he caught only glimpses of flying heels at either end of the corridor before they vanished.

よう。
そこまで辿り着ければの話だが――。
「あああっっっ！」
何かに踵をつかまれ、ハリーは物の見事に転倒し、うつ伏せのまま数メートル滑ってやっ
と止まった。
誰かが後ろで笑っている。
仰向けになって目を向けると、醜いドラゴンの形の花瓶の下に、壁の窪みに隠れているマルフォイが見えた。
「『足すくい呪い』だ、ポッター！」マルフォイが言った。
「おーい、先生――せんせーい！ 一人捕まえました！」
アンブリッジが遠くの角から、息を切らし、しかしうれしそうににっこりしながら、せかせかとやって来た。
「彼じゃない！」アンブリッジは床に転がるハリーを見て歓声をあげた。
「お手柄よ、ドラコ、お手柄、ああ、よくやったわー スリザリン、五十点！ あとはわたくしに任せなさい……立つんです、ポッター！」
ハリーは立ち上がって、二人を睨みつけた。アンブリッジがこんなにうれしそうなのは見たことがなかった。
アンブリッジは、ハリーの腕を万力で締めるような力で押さえつけ、にっこり笑ってマルフォイを見た。
「ドラコ、あなたは飛び回って、ほかの連中を逮捕できるかどうか、やってみて」
アンブリッジが言った。
「みんなには、図書室を探すように言いなさい――誰か息を切らしていないかどうか――トイレも調べなさい。ミス パーキンソンが女子トイレを調べられるでしょう――さあ、行って。――あなたのほうは」
マルフォイが行ってしまうと、アンブリッジが、とっておきの柔らかい、危険な声で、ハリーに言った。
「わたくしと一緒に校長室に行くのですよ、ポッター」
数分も経たないうちに、二人は石のガーゴイル像のところにいた。
ハリーは、他のみんなが捕まってしまったか

He started to run right; there was a boys' bathroom up ahead, he could pretend he'd been in there all the time if he could just reach it —

“AAARGH!”

Something caught him around the ankles and he fell spectacularly, skidding along on his front for six feet before coming to a halt. Someone behind him was laughing. He rolled over onto his back and saw Malfoy concealed in a niche beneath an ugly dragon-shaped vase.

“Trip Jinx, Potter!” he said. “Hey, Professor — PROFESSOR! I’ve got one!”

Umbridge came bustling around the far corner, breathless but wearing a delighted smile.

“It’s him!” she said jubilantly at the sight of Harry on the floor. “Excellent, Draco, excellent, oh, very good — fifty points to Slytherin! I’ll take him from here. ... Stand up, Potter!”

Harry got to his feet, glaring at the pair of them. He had never seen Umbridge looking so happy. She seized his arm in a vicelike grip and turned, beaming broadly, to Malfoy. “You hop along and see if you can round up anymore of them, Draco,” she said. “Tell the others to look in the library — anybody out of breath — check the bathrooms, Miss Parkinson can do the girls’ ones — off you go — and you,” she added in her softest, most dangerous voice, as Malfoy walked away. “You can come with me to the headmaster’s office, Potter.”

They were at the stone gargoyle within minutes. Harry wondered how many of the others had been caught. He thought of Ron — Mrs. Weasley would kill him — and of how Hermione would feel if she was expelled before she could take her O.W.L.s. And it had been Seamus’s very first meeting ... and

どうか心配だった。ロンのことを考えたーウィーズリーおばさんはロンを殺しかねないな。ーそれに、ハーマイオニーは、OWL試験を受ける前に退学になったらどう思うだろう。

それと、今日はシェーマスの最初のDAだったのに……ネビルはあんなに上手くなっていたのに……。

「フィフー フィズビー」アンブリッジが唱えると、石のガーゴイルが飛び退き、壁が左右にパッキリ開いた。

動く石の螺旋階段に乗り、二人は磨き上げられた扉の前に出た。グリフィンの形のドアノッカーがついている。

アンブリッジはノックもせず、ハリーをむんずとつかんだまま、ずかずかと部屋に踏み込んだ。

校長室は人で一杯だった。

ダンブルドアは穏やかな表情で机の前に座り、長い指の先を組み合わせていた。

マクゴナガル先生が緊張した面持ちで、その脇にびしりと直立している。

魔法大臣、コーネリウス ファッジが、暖炉のそばで、いかにもうれしそうに爪先立ちで前後に体を揺すっている。

扉の両脇に、護衛のように立っているのは、キングズリー シャックルボルトと、ハリーの知らない厳しい顔つきの、短髪剛毛の魔法使いだ。

そばかす顔にメガネを掛け、羽根ペンと分厚い羊皮紙の巻紙を持って、どうやら記録を取る構えのパーシー ウィーズリーが、興奮した様子で壁際をうろうろしている。

歴代校長の肖像画は、今夜は狸寝入りしていない。

全員目を開け、まじめな顔で眼下の出来事を見守っている。

ハリーが入ってくると、何人かが隣の額に入り込み、切迫した様子で、隣人に何か耳打ちした。

扉がバタンと閉まったとき、ハリーはアンブリッジの手を振り解いた。

コーネリウス ファッジは、何やら毒々しい満足感を浮かべてハリーを睨みつけていた。

「さーて」ファッジが言った。

Neville had been getting so good. ...

“Fizzing Whizbee,” sang Umbridge, and the stone gargoyle jumped aside, the wall behind split open, and they ascended the moving stone staircase. They reached the polished door with the griffin knocker, but Umbridge did not bother to knock, she strode straight inside, still holding tight to Harry.

The office was full of people. Dumbledore was sitting behind his desk, his expression serene, the tips of his long fingers together. Professor McGonagall stood rigidly beside him, her face extremely tense. Cornelius Fudge, Minister of Magic, was rocking backward and forward on his toes beside the fire, apparently immensely pleased with the situation. Kingsley Shacklebolt and a tough-looking wizard Harry did not recognize with very short, wiry hair were positioned on either side of the door like guards, and the freckled, bespectacled form of Percy Weasley hovered excitedly beside the wall, a quill and a heavy scroll of parchment in his hands, apparently poised to take notes.

The portraits of old headmasters and mistresses were not shamming sleep tonight. All of them were watching what was happening below, alert and serious. As Harry entered, a few flitted into neighboring frames and whispered urgently into their neighbors' ears.

Harry pulled himself free of Umbridge's grasp as the door swung shut behind them. Cornelius Fudge was glaring at him with a kind of vicious satisfaction upon his face.

“Well,” he said. “Well, well, well ...”

Harry replied with the dirtiest look he could muster. His heart drummed madly inside him, but his brain was oddly cool and clear.

「さて、さて、さて……」
ハリーはありったけの憎々しさを目に込めてファッジに応えた。
心臓は激しく鼓動していたが、頭は不思議に冷静で、冴えていた。
「この子はグリフィンドール塔に戻る途中でした」アンブリッジが言った。
声にいやらしい興奮を感じ取れた。
トレローニー先生が玄関ホールで惨めに取り乱すのを見つめていたときのアンブリッジの声にも、ハリーは同じ残忍な悦びを聞き取っていた。
「あのマルフォイ君が、この子を追い詰めましたわ」
「あの子がかね？」ファッジが感心したように言った。
「忘れずにルシウスに言わねばなるまい。さて、ポッター……。どうしてここに連れてこられたか、わかっているだろうな？」
ハリーは、挑戦的に「はい」と答えるつもりだった。口を開いた。
言葉が半分出なかったとき、ふとダンブルドアの顔が目に入った。
ダンブルドアはハリーを直接に見てはいなかった——その視線は、ハリーの肩越しに、ある一点を見つめていた。
——しかし、ハリーがその顔をじっと見ると、ダンブルドアがほんのわずかに首を横に振った。
ハリーは半分口に出した言葉を方向転換した。
「は——いいえ」
「なんだね？」ファッジが聞いた。
「いいえ」ハリーはきっぱりと答えた。
「どうしてここにいるのか、わからんと？」
「わかりません」ハリーが言った。
ファッジは面食らって、ハリーを、そしてアンブリッジを見た。
その一瞬の隙に、ハリーは急いでもう一度ダンブルドアを盗み見た。
すると、ダンブルドアは絨毯に向かって、微かに頷き、ウィンクしたような気配を見せた。
「では、まったくわからんと」ファッジはたつぷりと皮肉を込めて言った。

“He was heading back to Gryffindor Tower,” said Umbridge. There was an indecent excitement in her voice, the same callous pleasure Harry had heard as she watched Professor Trelawney dissolving with misery in the entrance hall. “The Malfoy boy cornered him.”

“Did he, did he?” said Fudge appreciatively. “I must remember to tell Lucius. Well, Potter ... I expect you know why you are here?”

Harry fully intended to respond with a defiant “yes”: His mouth had opened and the word was half formed when he caught sight of Dumbledore’s face. Dumbledore was not looking directly at Harry; his eyes were fixed upon a point just over his shoulder, but as Harry stared at him, he shook his head a fraction of an inch to each side.

Harry changed direction mid-word.

“Yeh — no.”

“I beg your pardon?” said Fudge.

“No,” said Harry, firmly.

“You *don’t* know why you are here?”

“No, I don’t,” said Harry.

Fudge looked incredulously from Harry to Professor Umbridge; Harry took advantage of his momentary inattention to steal another quick look at Dumbledore, who gave the carpet the tiniest of nods and the shadow of a wink.

“So you have no idea,” said Fudge in a voice positively sagging with sarcasm, “why Professor Umbridge has brought you to this office? You are not aware that you have broken any school rules?”

“School rules?” said Harry. “No.”

“Or Ministry decrees?” amended Fudge

「アンブリッジ先生が、校長室に君を連れてきた理由がわからんと？ 校則を破った覚えはないと？」

「校則？」ハリーが繰り返した。

「いいえ」

「魔法省令はどうだ？」ファッジが腹立たしげに言い直した。

「いいえ、僕の知るかぎりでは」ハリーは平然と言った。

ハリーの心臓はまだ激しくドキドキしていた。

ファッジの血圧が上がるのを見られるだけでも、嘘をつく価値があると言えるくらいだったが、いったいどうやって嘘をつき通せるのか、ハリーには見当もつかなかった。

誰かがD.A.のことをアンブリッジに告げ口したのだったら、リーダーの僕は、いますぐ荷物をまとめるしかないだろう。

「では、これは君には初耳かね？」ファッジの声は、いまや怒りでどすが利いていた。

「校内で違法な学生組織が発覚したのだが」

「はい、初耳です」ハリーは寝耳に水だと純真無垢な顔をしてみせたが説得力はなかった。

「大臣閣下」すぐ脇で、アンブリッジが滑らかに言った。

「通報者を連れてきたほうが、話が早いでしょう」

「うむ、うむ。そうしてくれ」ファッジが頷き、アンブリッジが出ていくとき、ダンブルドアをちらりと意地悪な目つきで見た。

「何と言っても、ちゃんとした目撃者が一番だからな、ダンブルドア？」

「まったくじやよ、コーネリウス」ダンブルドアが小首を傾げながら、重々しく言った。待つこと数分。その間、誰も互いに目を合わせなかった。

そして、ハリーの背後で扉の開く音がした。アンブリッジが、チョウの友達 of 巻き毛のマリエッタの肩をつかんで、ハリーの脇を通り過ぎた。

マリエッタは両手で顔を覆っている。

「怖がらなくてもいいのよ」アンブリッジ先生が、マリエッタの背中を軽く叩きながら、やさしく声をかけた。

angrily.

“Not that I’m aware of,” said Harry blandly.

His heart was still hammering very fast. It was almost worth telling these lies to watch Fudge’s blood pressure rising, but he could not see how on earth he would get away with them. If somebody had tipped off Umbridge about the D.A. then he, the leader, might as well be packing his trunk right now.

“So it’s news to you, is it,” said Fudge, his voice now thick with anger, “that an illegal student organization has been discovered within this school?”

“Yes, it is,” said Harry, hoisting an unconvincing look of innocent surprise onto his face.

“I think, Minister,” said Umbridge silkily from beside him, “we might make better progress if I fetch our informant.”

“Yes, yes, do,” said Fudge, nodding, and he glanced maliciously at Dumbledore as Umbridge left the room. “There’s nothing like a good witness, is there, Dumbledore?”

“Nothing at all, Cornelius,” said Dumbledore gravely, inclining his head.

There was a wait of several minutes, in which nobody looked at each other, then Harry heard the door open behind him. Umbridge moved past him into the room, gripping by the shoulder Cho’s curly-haired friend Marietta, who was hiding her face in her hands.

“Don’t be scared, dear, don’t be frightened,” said Professor Umbridge softly, patting her on the back, “it’s quite all right, now. You have done the right thing. The minister is very pleased with you. He’ll be telling your mother what a good girl you’ve been. Marietta’s mother, Minister,” she added, looking up at

「大丈夫ですよ。あなたは正しいことをしたの。大臣がとてもお喜びですよ。あなたのお母様に、あなたがとってもいい子だったって、言ってくれるでしょう。大臣、マリエッタの母親は」

アンブリッジはファッジを見上げて言葉を続けた。

「魔法運輸部、暖炉飛行ネットワーク室のエッジコム夫人です。——ホグワーツの暖炉を見張るのを手伝ってくれていたことはご存知でしょう」

「結構、結構！」ファッジは心底うれしそうに言った。

「この母にしてこの娘ありだな、え？ さあ、さあ、いい子だね。顔を上げて、恥ずかしがらずに。君の話を聞こうじゃ——これは、なんと！」

マリエッタが顔を上げると、ファッジはぎょっとして飛び退き、危うく暖炉に突っ込みそうになった。

マントの裾が煙りはじめ、ファッジは悪態をつきながら、バタバタと裾を踏みつけた。

マリエッタは泣き声をあげ、ローブを目のところで引っぱり上げた。

しかし、もうみんなが、その変わり果てた顔を見てしまった。

マリエッタの頬から鼻を横切って、膿んだ紫色のでき物がびっしりと広がり、文字を描いていたのだ。

-密告者-

「さあ、そんなぶつぶつは気にしないで」アンブリッジがもどかしげに言った。

「口からローブを離して、大臣に申し上げなさい——」

しかし、マリエッタは口を覆ったままでもう一度泣き声をあげ、激しく首を振った。

「バカな子ね。もう結構。わたくしがお話します」アンブリッジがびしゃりとそう言うのと、例の気味の悪いにっこり笑顔を貼りつけ、話したした。

「さて、大臣、このミス エッジコムが、今夜、夕食後間もなくわたくしの部屋にやってきて、何か話したいことがあると言うので

Fudge, “is Madam Edgecombe from the Department of Magical Transportation. Floo Network office — she’s been helping us police the Hogwarts fires, you know.”

“Jolly good, jolly good!” said Fudge heartily. “Like mother, like daughter, eh? Well, come on, now, dear, look up, don’t be shy, let’s hear what you’ve got to — galloping gargoyles!”

As Marietta raised her head, Fudge leapt backward in shock, nearly landing himself in the fire. He cursed and stamped on the hem of his cloak, which had started to smoke, and Marietta gave a wail and pulled the neck of her robes right up to her eyes, but not before the whole room had seen that her face was horribly disfigured by a series of close-set purple pustules that had spread across her nose and cheeks to form the word “SNEAK.”

“Never mind the spots now, dear,” said Umbridge impatiently, “just take your robes away from your mouth and tell the Minister —”

But Marietta gave another muffled wail and shook her head frantically.

“Oh, very well, you silly girl, *I’ll* tell him,” snapped Umbridge. She hitched her sickly smile back onto her face and said, “Well, Minister, Miss Edgecombe here came to my office shortly after dinner this evening and told me she had something she wanted to tell me. She said that if I proceeded to a secret room on the seventh floor, sometimes known as the Room of Requirement, I would find out something to my advantage. I questioned her a little further and she admitted that there was to be some kind of meeting there. Unfortunately at that point this hex,” she waved impatiently at Marietta’s concealed face, “came into operation and upon catching sight of her face

す。そして、八階の、とくに『必要の部屋』と呼ばれる秘密の部屋に行けば、わたくしにとって何か都合のよいものが見つかるだろうと言うのです。もう少し問い詰めたところ、この子は、そこで何らかの会合が行われるはずだと白状しました。残念ながら、その時点で、この呪いが」

アンブリッジはマリエッタが隠している顔を指して、イライラと手を振った。

「効いてきました。わたくしの鏡に映った自分の顔を見たとき、この子は哑然として、それ以上何も話せなくなりました」

「よし、よし」ファッジは、やさしい父親の眼差しとはこんなものだろうと自分なりに考えたような目で、マリエッタを見つめながら言った。

「アンブリッジ先生のところに話しにいったのは、とっても勇敢だったね。君のやったことは、まさに正しいことだったんだよ。あ、その会合で何があったのか、話しておくれ。目的は何かね？ 誰が来ていたのかね？」しかし、マリエッタは口をきかなかった。怯えたように目を見開き、またしても首を横に振るだけだった。

「逆呪いはないのかね？」マリエッタの顔を指しながら、ファッジがもどかしげにアンブリッジに聞いた。

「この子が自由にしゃべれるように」

「まだ、どうにも見つかっておりません」アンブリッジがしぶしぶ認めた。

ハリーはハーマイオニーの呪いをかける能力に、誇らしさが込み上げてくるのを感じた。

「でも、この子がしゃべらなくとも、問題ありませんわ。その先はわたくしがお話できます」

「ご記憶とは存じますが、大臣、去る十月にお送りした報告書で、ポッターがホグズミードのホグズヘッドで、たくさんの生徒たちと会合したと、」

「何か証拠がありますか？」マクゴナガル先生が口を挟んだ。

「ウィリー ウィダーシンの証言がありますよ、ミネルバ。たまたまそのとき、そのバーに居合わせましてね。たしかに、包帯でグルグル巻きでしたが、聞く能力は無傷でした

in my mirror the girl became too distressed to tell me any more.”

“Well, now,” said Fudge, fixing Marietta with what he evidently imagined was a kind and fatherly look. “It is very brave of you, my dear, coming to tell Professor Umbridge, you did exactly the right thing. Now, will you tell me what happened at this meeting? What was its purpose? Who was there?”

But Marietta would not speak. She merely shook her head again, her eyes wide and fearful.

“Haven’t we got a counterjinx for this?” Fudge asked Umbridge impatiently, gesturing at Marietta’s face. “So she can speak freely?”

“I have not yet managed to find one,” Umbridge admitted grudgingly, and Harry felt a surge of pride in Hermione’s jinxing ability. “But it doesn’t matter if she won’t speak, I can take up the story from here.

“You will remember, Minister, that I sent you a report back in October that Potter had met a number of fellow students in the Hog’s Head in Hogsmeade —”

“And what is your evidence for that?” cut in Professor McGonagall.

“I have testimony from Willy Widdershins, Minerva, who happened to be in the bar at the time. He was heavily bandaged, it is true, but his hearing was quite unimpaired,” said Umbridge smugly. “He heard every word Potter said and hastened straight to the school to report to me —”

“Oh, so *that’s* why he wasn’t prosecuted for setting up all those regurgitating toilets!” said Professor McGonagall, raising her eyebrows. “What an interesting insight into our justice system!”

よ」

アンブリッジが得意げに言った。

「この男が、ポッターの一言一句漏らさず聞きましてね、早速わたくしに報告しに、学校に直行しー」

「まあ、だから、あの男は、一連の逆流トイレ事件を仕組んだ件で、起訴されなかったのですね！」

マクゴナガル先生の眉が吊り上がった。

「わが司法制度の、おもしろい内幕ですわ！」

「露骨な汚職だ！」ダンブルドアの机の後ろの壁に掛かった、でっぷりとした赤鼻の魔法使いの肖像画が吠えた。

「わしの時代には、魔法省が小悪党と取引することなどなかった。いいや、絶対に！」

「お言葉を感謝しますぞ、フォーテスキュー。もう十分じゃ」

ダンブルドアが穏やかに言った。

「ポッターが生徒たちと会合した目的は」アンブリッジが話を続けた。

「違法な組織に加盟するよう、みんなを説得するためでした。組織の目的は、魔法省が学童には不適切だと判断した呪文や呪いを学ぶことであー」

「ドロース、どうやらそのへんは思い違いじゃとお気づきになると思うがの」

ダンブルドアが、折れ曲がった鼻の中ほどにちゃんと載った半月メガネの上から、アンブリッジをじっと見て静かに言った。

ハリーはダンブルドアを見つめた。

今回のことで、ハリーのためにどう言い逃れするつもりなのか、見当もつかなかった。

ウィリー ウィダーシンがホッグズ ヘッドで、本当にハリーの言ったことを全部聞いていたなら、もう逃れる術はない。

「ほっほー！」ファッジがまた爪先立ちで体をピョコピョコ上下に揺すった。

「よろしい。ポッターの窮地を救うための、新しいほら話をお聞かせ願いますか。さあ、どうぞ、ダンブルドア、さあーウィリー ウィダーシンが嘘をついたとでも？ それとも、あの日ホッグズ ヘッドにいたのは、ポッターには瓜二つの双子だったとでも？ または、時間を逆転させたとか、死んだ男が生

“Blatant corruption!” roared the portrait of the corpulent, red-nosed wizard on the wall behind Dumbledore’s desk. “The Ministry did not cut deals with petty criminals in my day, no sir, they did not!”

“Thank you, Fortescue, that will do,” said Dumbledore softly.

“The purpose of Potter’s meeting with these students,” continued Professor Umbridge, “was to persuade them to join an illegal society, whose aim was to learn spells and curses the Ministry has decided are inappropriate for school-age —”

“I think you’ll find you’re wrong there, Dolores,” said Dumbledore quietly, peering at her over the half-moon spectacles perched halfway down his crooked nose.

Harry stared at him. He could not see how Dumbledore was going to talk him out of this one; if Willy Widdershins had indeed heard every word he said in the Hog’s Head there was simply no escaping it.

“Oho!” said Fudge, bouncing up and down on the balls of his feet again. “Yes, do let’s hear the latest cock-and-bull story designed to pull Potter out of trouble! Go on, then, Dumbledore, go on — Willy Widdershins was lying, was he? Or was it Potter’s identical twin in the Hog’s Head that day? Or is there the usual simple explanation involving a reversal of time, a dead man coming back to life, and a couple of invisible dementors?”

Percy Weasley let out a hearty laugh.

“Oh, very good, Minister, very good!”

Harry could have kicked him. Then he saw, to his astonishment, that Dumbledore was smiling gently too.

“Cornelius, I do not deny — and nor, I am

き返ったとか、見えもしない『吸魂鬼』が二体いたとかいう、例の将もない言い逃れか？」

「ああ、お見事。大臣、お見事！」
パーシー ウィーズリーが思いっきり笑った。

ハリーは蹴っ飛ばしてやりたかった。
ところが、ダンブルドアを見ると、驚いたことに、ダンブルドアも柔らかく微笑んでいた。

「コーネリウス、わしは否定しておらんよ。それに、ハリーも否定せんじやろうーその日にハリーがホッグズ ヘッドにいたことも、『闇の魔術に対する防衛術』のグループに生徒を集めようとしていたことも。わしは単に、その時点で、そのようなグループが違法じゃったとドロレスが言うのは、まったく間違っておると指摘するだけじゃ。ご記憶じゃろうが、学生の組織を禁じた魔法省令は、ハリーがホグズミードで会合した二日後から発効しておる。じゃから、ハリーはホッグズ ヘッドで、何らの規則も破っておらんのじゃ」

パーシーは何かとても重いもので、顔をぶん殴られたような表情をした。

ファッジはポカンと口を開け、ピョコピョコの途中で止まったまま動かなくなった。

アンブリッジが最初に回復した。

「それは大変結構なことですわ、校長」アンブリッジが甘ったるく微笑んだ。

「でも、教育令第二十四号が発効してから、もう六ヶ月近く経ちますわね。最初の会合が違法でなかったとしても、それ以後の会合は全部、間違いなく違法ですわ」

「左様」ダンブルドアは組み合わせた指の上から、礼儀上アンブリッジに注意を払いながら言った。

「もし、教育令の発効後に会合が続いておれば、たしかに違法になりうるじやろう。そのような集会が続いていたという証拠を、何かお持ちかな？」

ダンブルドアが話している間に、ハリーは背後で、サワサワという音を聞いた。

そして、キングズリーが何かを囁いたような気がした。

sure, does Harry — that he was in the Hog's Head that day, nor that he was trying to recruit students to a Defense Against the Dark Arts group. I am merely pointing out that Dolores is quite wrong to suggest that such a group was, at that time, illegal. If you remember, the Ministry decree banning all student societies was not put into effect until two days after Harry's Hogsmeade meeting, so he was not breaking any rules in the Hog's Head at all.”

Percy looked as though he had been struck in the face by something very heavy. Fudge remained motionless in mid-bounce, his mouth hanging open.

Umbridge recovered first.

“That's all very fine, Headmaster,” she said, smiling sweetly. “But we are now nearly six months on from the introduction of Educational Decree Number Twenty-four. If the first meeting was not illegal, all those that have happened since most certainly are.”

“Well,” said Dumbledore, surveying her with polite interest over the top of his interlocked fingers, “they certainly *would* be, if they *had* continued after the decree came into effect. Do you have any evidence that these meetings continued?”

As Dumbledore spoke, Harry heard a rustle behind him and rather thought Kingsley whispered something. He could have sworn too that he felt something brush against his side, a gentle something like a draft or bird wings, but looking down he saw nothing there.

“Evidence?” repeated Umbridge with that horrible wide toadlike smile. “Have you not been listening, Dumbledore? Why do you think Miss Edgecombe is here?”

“Oh, can she tell us about six months' worth of meetings?” said Dumbledore, raising his

それに、間違いなく脇腹を、何かがさっと撫でたような感じがした。

一陣の風か、鳥の翼のような柔らかいものだ。しかし、下を見ても、何も見えなかった。

「証拠？」アンブリッジは、ガマガエルのように口を広げ、にたりと恐ろしい微笑を見せた。

「お聞きになってらっしゃいませんでしたの？ ダンブルドア？ ミス エッジコムがなぜここにいるとお思いですか？」

「おお、六ヶ月分の会合のすべてについて話せるのかね？」ダンブルドアは眉をくいと上げた。

「わしはまた、ミス エッジコムが、今夜の会合のことを報告していただけじゃという印象じゃったが」

「ミス エッジコム」アンブリッジが即座に聞いた。

「いい子だから、会合がどのぐらいの期間続いていたのか、話してごらん。頷くか、首を横に振るかでいいのよ。そのせいで、でき物がひどくなることはありませんからね。この六ヶ月、定期的に会合が開かれたの？」ハリーは胃袋がズドンと落ち込むを感じた。

おしまいだ。

僕たちは動かしようのない証拠をつかまれた。ダンブルドアだってごまかせやしない。

「首を縦に振るか、横に振るかするのよ」アンブリッジがなだめすかすようにマリエッタに言った。

「ほら、ほら、それでまた呪いが効いてくることはないのですから」

部屋の全員が、マリエッタの顔の上部を見つめていた。

引っ張り上げたローブと、巻き毛の前髪との隙間に、目だけが見えていた。暖炉の灯りのいたずらか、マリエッタの目は、妙に虚ろだった。そして――ハリーにとっては青天の霹靂だったが――マリエッタは首を横に振った。

アンブリッジはちらりとファッジを見たが、すぐにマリエッタに視線を戻した。

「質問がよくわからなかったのね？ そうでし

eyebrows. “I was under the impression that she was merely reporting a meeting tonight.”

“Miss Edgecombe,” said Umbridge at once, “tell us how long these meetings have been going on, dear. You can simply nod or shake your head, I’m sure that won’t make the spots worse. Have they been happening regularly over the last six months?”

Harry felt a horrible plummeting in his stomach. This was it, they had hit a dead end of solid evidence that not even Dumbledore would be able to shift aside. ...

“Just nod or shake your head, dear,” Umbridge said coaxingly to Marietta. “Come on, now, that won’t activate the jinx further. ...”

Everyone in the room was gazing at the top of Marietta’s face. Only her eyes were visible between the pulled up robes and her curly fringe. Perhaps it was a trick of the firelight, but her eyes looked oddly blank. And then — to Harry’s utter amazement — Marietta shook her head.

Umbridge looked quickly at Fudge and then back at Marietta.

“I don’t think you understood the question, did you, dear? I’m asking whether you’ve been going to these meetings for the past six months? You have, haven’t you?”

Again, Marietta shook her head.

“What do you mean by shaking your head, dear?” said Umbridge in a testy voice.

“I would have thought her meaning was quite clear,” said Professor McGonagall harshly. “There have been no secret meetings for the past six months. Is that correct, Miss Edgecombe?”

よう？ わたくしが聞いたのはね、あなたが、この六ヶ月にわたり、会合に参加していたかどうかということなのよ。参加していたんでしょう？」 マリエッタはまたもや首を横に振った。

「首を振ったのはどういう意味なの？」 アンブリッジの声が苛立っていた。

「私は、どういう意味か明白だと思いましたが」 マクゴナガル先生が厳しい声で言った。「この六ヶ月間、秘密の会合はなかったということです。そうですね？ ミス エッジコム？」

マリエッタが頷いた。

「でも、今夜会合がありました！」 アンブリッジが激怒した。

「会合はあったのです。ミス エッジコム、あなたがわたくしにそう言いました。『必要の部屋』でと！ そして、ポッターが首謀者だった。そうでしょう？ ポッターが組織した。ポッターが——どうして、あなた、首を横に振ってるの？」

「まあ、通常ですと、首を横に振るときは」 マクゴナガルが冷たく言った。

「『いいえ』という意味です。ですから、ミス エッジコムが、まだヒトの知らない使い方で合図を送っているのだから——」 アンブリッジ先生はマリエッタをつかみ、ぐるりと回して自分のほうに向かせ、激しく揺すりはじめた。

間髪を容れず立ち上がったダンブルドアが、杖を上げた。

キングズリーがずいと進み出た。

アンブリッジは、まるで火傷をしたかのように両手をプルプル振りながら、マリエッタから飛び退いた。

「ドローレス、わしの生徒たちに手荒なことは許さぬ」ダンブルドアはこのとき初めて怒っているように見えた。

「マダム アンブリッジ、落ち着いてください」キングズリーがゆったりした深い声で言った。

「面倒を起こさないほうがいいでしょう」

「いいえ」アンブリッジは聳えるようなキングズリーの姿をちらりと見上げながら、息を弾ませて言った。

Marietta nodded.

“But there was a meeting tonight!” said Umbridge furiously. “There was a meeting, Miss Edgecombe, you told me about it, in the Room of Requirement! And Potter was the leader, was he not, Potter organized it, Potter — *why are you shaking your head, girl?*”

“Well, usually when a person shakes their head,” said McGonagall coldly, “they mean ‘no.’ So unless Miss Edgecombe is using a form of sign language as yet unknown to humans —”

Professor Umbridge seized Marietta, pulled her around to face her, and began shaking her very hard. A split second later Dumbledore was on his feet, his wand raised. Kingsley started forward and Umbridge leapt back from Marietta, waving her hands in the air as though they had been burned.

“I cannot allow you to manhandle my students, Dolores,” said Dumbledore, and for the first time, he looked angry.

“You want to calm yourself, Madam Umbridge,” said Kingsley in his deep, slow voice. “You don’t want to get yourself into trouble now.”

“No,” said Umbridge breathlessly, glancing up at the towering figure of Kingsley. “I mean, yes — you’re right, Shackbolt — I — I forgot myself.”

Marietta was standing exactly where Umbridge had released her. She seemed neither perturbed by Umbridge’s sudden attack, nor relieved by her release. She was still clutching her robe up to her oddly blank eyes, staring straight ahead of her. A sudden suspicion connected to Kingsley’s whisper and the thing he had felt shoot past him sprang into

「つまり、ええそう。あなたの言うとおりでわ、シャックルボルトーわたしーわたくし、つい我を忘れて」
マリエッタは、アンブリッジが手を離れたその位置で、そのまま突っ立っていた。
突然アンブリッジにつかみかかられても動揺した様子がなく、放されてほっとした様子もない。
奇妙に虚ろな目のところまでローブを引き上げたまま、まっすぐ前を見つめていた。
突然、ハリーはもしやと思った。
キングズリーの囁きと、脇腹を掠めた感覚とに結びつく疑いだった。
「ドローレス」何かに徹底的に決着をつけようという雰囲気、ファッジが言った。
「今夜の会合だがー間違いなく行われたとわかっている集会のことだがー」
「はい」アンブリッジは気を取り直して答えた。
「はい……ええ、ミス エッジコムがわたくしに漏らし、私は信用できる生徒たちを何人か連れて、すぐさま八階に赴きました。会合に集まった生徒たちを現行犯で捕まえようと思いましたが、ところが、私が来るという警告が前もって伝わったらしく、八階に着いたときには、みんなが蜘蛛の子を散らすように逃げていくところでした。しかし、それはどうでもよい。全員の名前がここにあります。ミス パーキンソンが、わたくしの命で、何か残っていないかと『必要の部屋』に駆け込みましてね。証拠が必要でしたが、それが部屋にありました」
ハリーにとっては最悪なことに、アンブリッジはポケットから、「必要の部屋」の壁に貼ってあった名簿を取り出し、ファッジに手渡した。
「このリストにポッターの名前を見た瞬間、わたくしは問題が何かわかりました」アンブリッジが静かに言った。
「でかした」ファッジは満面の笑みだった。
「でかしたぞ、ドローレス。さて……なんと……」
ファッジは、杖を軽く振ってマリエッタのそばに立ったままのダンブルドアを見た。
「生徒たちが、グループを何と命名したかわ

Harry's mind.

“Dolores,” said Fudge, with the air of trying to settle something once and for all, “the meeting tonight — the one we know definitely happened —”

“Yes,” said Umbridge, pulling herself together, “yes ... well, Miss Edgecombe tipped me off and I proceeded at once to the seventh floor, accompanied by certain *trustworthy* students, so as to catch those in the meeting red-handed. It appears that they were forewarned of my arrival, however, because when we reached the seventh floor they were running in every direction. It does not matter, however. I have all their names here, Miss Parkinson ran into the Room of Requirement for me to see if they had left anything behind. ... We needed evidence and the room provided ...”

And to Harry's horror, she withdrew from her pocket the list of names that had been pinned upon the Room of Requirement's wall and handed it to Fudge.

“The moment I saw Potter's name on the list, I knew what we were dealing with,” she said softly.

“Excellent,” said Fudge, a smile spreading across his face. “Excellent, Dolores. And ... by thunder ...”

He looked up at Dumbledore, who was still standing beside Marietta, his wand held loosely in his hand.

“See what they've named themselves?” said Fudge quietly. “*Dumbledore's Army*.”

Dumbledore reached out and took the piece of parchment from Fudge. He gazed at the heading scribbled by Hermione months before and for a moment seemed unable to speak.

かるか？」ファッジが低い声で言った。

「ダンブルドア軍団だ」

ダンブルドアが手を伸ばしてファッジから羊皮紙を取った。

ハーマイオニーが何ヶ月も前に手書きした会の名前をじっと見つめ、ダンブルドアは、しばらく言葉が出ないように見えた。それから目を上げたダンブルドアは、微笑んでいた。

「さて、万事休すじゃな」ダンブルドアはさばさばと言った。

「わしの告白書をお望みかな、コーネリウス？ それとも、ここにおいでを目撃者を前に一言述べるだけで十分かの？」

マクゴナガルとキングズリーが顔を見合わせるのを、ハリーは見た。

二人とも恐怖の表情を浮かべていた。何が起きているのか、ハリーにはわからなかった。

どうやらファッジもわからなかったらしい。

「一言述べる？」ファッジがのろのろと言った。

「いったい——何のことやら——？」

「ダンブルドア軍団じゃよ、コーネリウス」ダンブルドアは、微笑んだまま、名簿をファッジの目の前でひらひらさせた。

「ポッター軍団ではない。ダンブルドア軍団じゃ」

「しーしかし——」

突然、ファッジの顔に閃きが走った。

ぎょっとなって後退りし、短い悲鳴をあげてまた暖炉から飛び出した。

「あなたが？」ファッジはまたしても燦るマントを踏みつけながら、囁くように言った。

「そうじゃ」ダンブルドアは愛想よく言った。

「あなたがこれを組織した？」

「いかにも」ダンブルドアが答えた。

「あなたがこの生徒たちを集めて——あなたの軍団を？」

「今夜がその最初の会合のはずじゃった」ダンブルドアが頷きながら言った。

「みんなが、それに加わることに関心を持つかどうかを見るだけのものじゃったが。どうやら、ミス エッジコムを招いたのは、明ら

Then he looked up, smiling.

“Well, the game is up,” he said simply. “Would you like a written confession from me, Cornelius — or will a statement before these witnesses suffice?”

Harry saw McGonagall and Kingsley look at each other. There was fear in both faces. He did not understand what was going on, and neither, apparently, did Fudge.

“Statement?” said Fudge slowly. “What — I don’t — ?”

“Dumbledore’s Army, Cornelius,” said Dumbledore, still smiling as he waved the list of names before Fudge’s face. “Not Potter’s Army. *Dumbledore’s Army.*”

“But — but —”

Understanding blazed suddenly in Fudge’s face. He took a horrified step backward, yelped, and jumped out of the fire again.

“You?” he whispered, stamping again on his smoldering cloak.

“That’s right,” said Dumbledore pleasantly.

“You organized this?”

“I did,” said Dumbledore.

“You recruited these students for — for your army?”

“Tonight was supposed to be the first meeting,” said Dumbledore, nodding. “Merely to see whether they would be interested in joining me. I see now that it was a mistake to invite Miss Edgecombe, of course.”

Marietta nodded. Fudge looked from her to Dumbledore, his chest swelling.

“Then you *have* been plotting against me!” he yelled.

かに間違いだったようじゃの」
マリエッタが頷いた。
ファッジは胸を反らしながら、マリエッタからダンブルドアへと視線を移した。
「では、やっぱり、あなたは私を陥れようとしていたのだな！」ファッジが喚いた。
「そのとおりじゃ」ダンブルドアは朗らかに言った。
「ダメです！」ハリーが叫んだ。
キングズリーがハリーに素早く警告の眼差しを送った。
マクゴナガルは脅すようにカッと目を見開いた。
しかし、ダンブルドアが何をしようとしているのか、ハリーは突然気づいたのだ。
そんなことをさせてはならない。
「だめですーダンブルドア先生ー！」
「静かにするのじゃ、ハリー。さもなくば、わしの部屋から出ていってもらうことになるぞ」
ダンブルドアが落ち着いて言った。
「そうだ、黙れ、ポッター」恐怖と喜びが入り交じったような目でダンブルドアをじろじろ見ながら、ファッジ吠え立てた。
「ほう、ほう、ほうー今夜はポッターを退学にするつもりでやって来たが、代わりにー」
「代わりにわしを逮捕することになるのう」ダンブルドアが微笑みながら言った。
「海老で鯛を釣ったようなものじゃな？」
「ウィーズリー！」いまや間違いなく喜びに打ち震えながら、ファッジが叫んだ。
「ウィーズリー、全部書き取ったか？ 言ったことをすべてだ。ダンブルドアの告白を。書き取ったか？」
「はい、閣下。大丈夫です、閣下！」
パーシーが待ってましたとばかりに答えた。
猛スピードでメモを取ったので、鼻の頭にインクが飛び散っている。
「ダンブルドアが魔法省に対抗する軍団を作り上げようとしていた件は？ 私を失脚させようと画策していた件は？」
「はい、閣下。書き取りましたとも！」嬉々としてメモに目を通しながら、パーシーが答えた。

“That’s right,” said Dumbledore cheerfully.

“NO!” shouted Harry.

Kingsley flashed a look of warning at him, McGonagall widened her eyes threateningly, but it had suddenly dawned upon Harry what Dumbledore was about to do, and he could not let it happen.

“No — Professor Dumbledore!”

“Be quiet, Harry, or I am afraid you will have to leave my office,” said Dumbledore calmly.

“Yes, shut up, Potter!” barked Fudge, who was still ogling Dumbledore with a kind of horrified delight. “Well, well, well — I came here tonight expecting to expel Potter and instead —”

“Instead you get to arrest me,” said Dumbledore, smiling. “It’s like losing a Knut and finding a Galleon, isn’t it?”

“Weasley!” cried Fudge, now positively quivering with delight, “Weasley, have you written it all down, everything he’s said, his confession, have you got it?”

“Yes, sir, I think so, sir!” said Percy eagerly, whose nose was splattered with ink from the speed of his note-taking.

“The bit about how he’s been trying to build up an army against the Ministry, how he’s been working to destabilize me?”

“Yes, sir, I’ve got it, yes!” said Percy, scanning his notes joyfully.

“Very well, then,” said Fudge, now radiant with glee. “Duplicate your notes, Weasley, and send a copy to the *Daily Prophet* at once. If we send a fast owl we should make the morning edition!” Percy dashed from the room, slamming the door behind him, and Fudge

「よろしい、では」ファッジはいまや、歡喜に顔を輝かせている。

「ウィーズリー、メモを複写して、一部を即刻、『日刊予言者新聞』に送れ。ふくろう速達便を使えば、朝刊に間に合うはずだ！」パーシーは脱兎のごとく部屋を飛び出し、扉をボタンと閉めた。ファッジがダンブルドアのほうに向き直った。

「おまえをこれから魔法省に連行する。そこで正式に起訴され、アズカバンに送られ、そこで裁判を待つことになる」

「ああ」ダンブルドアが穏やかに言った。

「やはりのう。その障害に突き当たると言うておったが」

「障害？」ファッジの声はまだ喜びに震えていた。

「ダンブルドア、私には何の障害も見えんぞ！」

「ところが」ダンブルドアが申し訳なさそうに言った。

「わたしには見えるのう」

「ほう、そうかね？」

「さて——あなたはどうか、わしが——どういう表現じゃったかの——神妙にする、という幻想のもとに骨を折っているようじゃ。残念ながら、コーネリウス、わたしは神妙に引かれては行かんよ。アズカバンに送られるつもりはまったくないのでな。もちろん、脱獄はできるじゃろうが——それはまったくの時間の無駄というものじゃ。正直言って、わたしにはほかにいろいろやりたいことがあるのでな」

アンブリッジの顔が、着実にだんだん赤くなってきた。

まるで、体の中に、熱湯が注がれていくようだった。

ファッジは間抜け面でダンブルドアを見つめていた。

まるで、突然パンチを食らったのに、それが信じられないという顔だ。

息が詰まったような音を出し、ファッジはキングズリーを振り返った。

それから、これまでただ一人、ずっと黙りこくっていた、短い白髪頭の男を振り返った。その男は、ファッジに大丈夫というように頷

turned back to Dumbledore. “You will now be escorted back to the Ministry, where you will be formally charged and then sent to Azkaban to await trial!”

“Ah,” said Dumbledore gently, “yes. Yes, I thought we might hit that little snag.”

“Snag?” said Fudge, his voice still vibrating with joy. “I see no snag, Dumbledore!”

“Well,” said Dumbledore apologetically, “I’m afraid I do.”

“Oh really?”

“Well — it’s just that you seem to be laboring under the delusion that I am going to — what is the phrase? ‘Come quietly’ I am afraid I am not going to come quietly at all, Cornelius. I have absolutely no intention of being sent to Azkaban. I could break out, of course — but what a waste of time, and frankly, I can think of a whole host of things I would rather be doing.”

Umbridge’s face was growing steadily redder, she looked as though she was being filled with boiling water. Fudge stared at Dumbledore with a very silly expression on his face, as though he had just been stunned by a sudden blow and could not quite believe it had happened. He made a small choking noise and then looked around at Kingsley and the man with short gray hair, who alone of everyone in the room had remained entirely silent so far. The latter gave Fudge a reassuring nod and moved forward a little, away from the wall. Harry saw his hand drift, almost casually, toward his pocket.

“Don’t be silly, Dawlish,” said Dumbledore kindly. “I’m sure you are an excellent Auror, I seem to remember that you achieved ‘Out-standing’ in all your N.E.W.T.s, but if you attempt to — er — ‘bring me in’ by force, I

き、壁から離れてわずかに前に出た。
ハリーは、その男の手が、ほとんど何気ない様子でポケットのほうに動くのを見た。
「ドーリッシュ、愚かなことはやめるがよい」ダンブルドアがやさしく言った。
「きみはたしかに優秀な闇祓いじゃ。NEW T試験で全科目「O 優」を取ったことを憶えておるよ——しかし、もしわしを力ずくで、その——あ——連行するつもりなら、きみを傷つけねばならなくなる」
ドーリッシュと呼ばれた男は、毒気を抜かれたような顔で、目を瞬いた。
それから、再びファッジを見たが、今度は、どうすべきか指示を仰いでいるようだった。
「すると」我に返ったファッジが嘲るように言った。
「おまえは、たった一人で、ドーリッシュ、シャックルボルト、ドロレス、それに私を相手にする心算かね？ え、ダンブルドア？」
「いや、まさか」ダンブルドアは微笑んでいる。
「あなたが、愚かにも無理やりそうさせるなら別じゃが」
「ダンブルドアは独りじゃありません！」マクゴナガル先生が、素早くローブに手を突っ込みながら、大声で言った。
「いや、ミネルバ、わし独りじゃ」ダンブルドアが厳しく言った。
「ホグワーツはあなたを必要としておる！」
「何をごたごたと！」ファッジが杖を抜いた。
「ドーリッシュ、シャックルボルト！ かかれ！」
部屋の中に、銀色の閃光が走った。ドーンと銃声のような音がして、床が震えた。
二度目の閃光が光ったとき、手が伸びてきて、ハリーの襟首をつかみ、体を床に押し倒した。
肖像画が何枚か、悲鳴をあげた。フォークスがギャーッと鳴き、埃が濛々と舞った。
埃に咽せながら、ハリーは、黒い影が一つ、目の前にばったり倒れるのを見た。
悲鳴、ドサッという音、そして誰かが叫んだ。

will have to hurt you.”

The man called Dawlish blinked, looking rather foolish. He looked toward Fudge again, but this time seemed to be hoping for a clue as to what to do next.

“So,” sneered Fudge, recovering himself, “you intend to take on Dawlish, Shackbolt, Dolores, and myself single-handed, do you, Dumbledore?”

“Merlin’s beard, no,” said Dumbledore, smiling. “Not unless you are foolish enough to force me to.”

“He will not be single-handed!” said Professor McGonagall loudly, plunging her hand inside her robes.

“Oh yes he will, Minerva!” said Dumbledore sharply. “Hogwarts needs you!”

“Enough of this rubbish!” said Fudge, pulling out his own wand. “Dawlish! Shackbolt! *Take him!*”

A streak of silver light flashed around the room. There was a bang like a gunshot, and the floor trembled. A hand grabbed the scruff of Harry’s neck and forced him down on the floor as a second silver flash went off — several of the portraits yelled, Fawkes screeched, and a cloud of dust filled the air. Coughing in the dust, Harry saw a dark figure fall to the ground with a crash in front of him. There was a shriek and a thud and somebody cried, “No!” Then the sound of breaking glass, frantically scuffling footsteps, a groan — and silence.

Harry struggled around to see who was half-strangling him and saw Professor McGonagall crouched beside him. She had forced both him and Marietta out of harm’s way. Dust was still floating gently down through the air onto them. Panting slightly, Harry saw a very tall figure

「ダメだ！」そして、ガラスの割れる音、バタバタと慌てふためく足音、呻き声……そして静寂。

ハリーはもがいて、誰が自分を絞め殺しかかっているのか見ようとした。

マクゴナガル先生が、ハリーのそばに蹲っているのが見えた。

ハリーとマリエッタの二人を押さえつけて、危害が及ばないようにしていた。

埃はまだ飛び交い、ゆっくりと三人の上に舞い降りてきた。

少し息を切らしながら、ハリーは背の高い誰かが近づいてくるのを見た。

「大丈夫かね？」ダンブルドアだった。

「ええ！」マクゴナガル先生が、ハリーとマリエッタを引っ張り上げながら立ち上がった。

埃が収まってきた。破壊された部屋がだんだん見えてきた。

ダンブルドアの机は引っくり返り、華奢なテーブルは全部床に倒れて、上に載っていた銀の計器類は紛々になっていた。

ファッジ、アンブリッジ、キングズリー、ドーリッシュは、床に転がって動かない。

不死鳥のフォークスは、静かに歌いながら、大きな円を描いて頭上に舞い上がった。

「気の毒じゃが、キングズリーにも呪いをかけざるをえなかった。そうせんと、きっと怪しまれるじゃろうからのう」ダンブルドアが低い声で言った。

「キングズリーは非常によい勘をしておった。皆が余所見をしている隙に、素早くミス エッジコムの記憶を修正してくれた。——わしが感謝しておったと伝えてくれるかの？ ミネルバ？」

「さて、皆、まもなく気がつくであろう。わしらが話をする時間があつたことを悟られぬほうがよからう——あなたは、時間がまったく経過していなかったかのように、あたかもみんな床に叩きつけられたばかりだったように振舞うのですぞ。記憶はないはずじゃから——」

「どちらに行かれるのですか？ ダンブルドア？」マクゴナガル先生が囁いた。

「グリモールド プレイスに？」

moving toward them.

“Are you all right?” said Dumbledore.

“Yes!” said Professor McGonagall, getting up and dragging Harry and Marietta with her.

The dust was clearing. The wreckage of the office loomed into view: Dumbledore’s desk had been overturned, all of the spindly tables had been knocked to the floor, their silver instruments in pieces. Fudge, Umbridge, Kingsley, and Dawlish lay motionless on the floor. Fawkes the phoenix soared in wide circles above them, singing softly.

“Unfortunately, I had to hex Kingsley too, or it would have looked very suspicious,” said Dumbledore in a low voice. “He was remarkably quick on the uptake, modifying Miss Edgecombe’s memory like that while everyone was looking the other way — thank him for me, won’t you, Minerva?”

“Now, they will all awake very soon and it will be best if they do not know that we had time to communicate — you must act as though no time has passed, as though they were merely knocked to the ground, they will not remember —”

“Where will you go, Dumbledore?” whispered Professor McGonagall. “Grimmauld Place?”

“Oh no,” said Dumbledore with a grim smile. “I am not leaving to go into hiding. Fudge will soon wish he’d never dislodged me from Hogwarts, I promise you. ...”

“Professor Dumbledore ...” Harry began.

He did not know what to say first: how sorry he was that he had started the D.A. in the first place and caused all this trouble, or how terrible he felt that Dumbledore was leaving to save him from expulsion? But Dumbledore cut

「いや、違う」ダンブルドアは厳しい表情で微笑んだ。

「わしは身を隠すわけではない。ファッジは、わしを Hogwarts から追い出したことを、すぐに後悔することになるじゃろう。間違いないそうなる」

「ダンブルドア先生……」ハリーが口を開いた。

何から言っているのかわからなかった。そもそも DA を始めたことでこんな問題を引き起こしてしまい、どんなに申し訳なく思っているかと言うべきだろうか？ それとも、ハリーを退学処分から救うためにダンブルドアが去っていくことが、どんなに辛いかと言うべきだろうか？ しかし、ダンブルドアは、ハリーが何も言えないでいるうちに、ハリーの口を封じた。

「よくお聞き、ハリー」ダンブルドアは差し迫ったように言った。

「『閉心術』を一心不乱に学ぶのじゃ。よいのか？ スネイプ先生の教えることを、すべて実行するのじゃ。とくに毎晩寝る前に、悪夢を見ぬよう心を閉じる練習をするのじゃ——なぜそうなのかは、まもなくわかるじゃろう。しかし、約束しておくれ——」

ドーリッシュと呼ばれた男が微かに身動きした。ダンブルドアはハリーの手首をつかんだ。

「よいな——心を閉じるのじゃ——」しかし、ダンブルドアの指がハリーの肌を握ったとき、額の傷痕に痛みが走った。そして、ハリーはまたしても、恐ろしい、蛇のような衝動が湧いてくるのを感じた。ダンブルドアを襲いたい、噛みついて傷つけたい——。

「——わかる 때가くるじゃろう」ダンブルドアが囁いた。

フォークスが輪を描いて飛び、ダンブルドアの上に低く舞い降りてきた。ダンブルドアはハリーを放し、手を上げて不死鳥の長い金色の尾をつかんだ。パッと炎が上がり、ダンブルドアの姿は不死鳥とともに消えた。

「あいつはどこだ？」ファッジが床から身を起こしながら叫んだ。

「どこなんだ？」

him off before he could say another word.

“Listen to me, Harry,” he said urgently, “you must study Occlumency as hard as you can, do you understand me? Do everything Professor Snape tells you and practice it particularly every night before sleeping so that you can close your mind to bad dreams — you will understand why soon enough, but you must promise me —”

The man called Dawlish was stirring. Dumbledore seized Harry’s wrist.

“Remember — close your mind —”

But as Dumbledore’s fingers closed over Harry’s skin, a pain shot through the scar on his forehead, and he felt again that terrible, snakelike longing to strike Dumbledore, to bite him, to hurt him —

“— you will understand,” whispered Dumbledore.

Fawkes circled the office and swooped low over him. Dumbledore released Harry, raised his hand, and grasped the phoenix’s long golden tail. There was a flash of fire and the pair of them had gone.

“Where is he?” yelled Fudge, pushing himself up from the ground. “Where is he?”

“I don’t know!” shouted Kingsley, also leaping to his feet.

“Well, he can’t have Disappeared!” cried Umbridge. “You can’t inside this school —”

“The stairs!” cried Dawlish, and he flung himself upon the door, wrenched it open, and disappeared, followed closely by Kingsley and Umbridge. Fudge hesitated, then got to his feet slowly, brushing dust from his front. There was a long and painful silence.

“Well, Minerva,” said Fudge nastily,

「わかりません」床から飛び起きながら、キングズリーが叫んだ。

「『姿くらし』したはずはありません」アンブリッジが喚いた。

「学校の中からはできるはずがないしー」

「階段だ！」ドーリッシュはそう叫ぶなり、扉に向かって身を翻し、ぐいと開けて姿が見えなくなった。

そのすぐあとに、キングズリーとアンブリッジが続いた。

ファッジは躊躇していたが、ゆっくり立ち上がり、ローブの前から埃を払った。

痛いほどの長い沈黙が流れた。

「さて、ミネルバ」ファッジがずたずたになったシャツの袖をまっすぐに整えながら、意地悪く言った。

「お気の毒だが、君の友人、ダンブルドアもこれまでだな」

「そうでしょうかしら？」マクゴナガル先生が軽蔑したように言った。

ファッジには聞こえなかったようだ。

壊れた部屋を見回していた。肖像画の何枚かが、ファッジに向かって、シューシューと非難を浴びせ、手で無礼な仕種をしたのも一二枚あった。

「その二人をベッドに連れていきなさい」ファッジはハリーとマリエッタに、もう用はないとばかりに頷き、マクゴナガル先生を振り返って言った。

マクゴナガル先生は何も言わず、ハリーとマリエッタを連れてつかつかと扉のほうに歩いた。

扉がボタンと閉まる間に、ハリーはフィニアス ナイジェラスの声を聞いた。

「いやあ、大臣。私は、ダンブルドアと色々な点で意見が合わないのだが……しかし、あの人は、とにかく粹ですよ……」

straightening his torn shirtsleeve, “I’m afraid this is the end of your friend Dumbledore.”

“You think so, do you?” said Professor McGonagall scornfully.

Fudge seemed not to hear her. He was looking around at the wrecked office. A few of the portraits hissed at him; one or two even made rude hand gestures.

“You’d better get those two off to bed,” said Fudge, looking back at Professor McGonagall with a dismissive nod toward Harry and Marietta.

She said nothing, but marched Harry and Marietta to the door. As it swung closed behind them, Harry heard Phineas Nigellus’s voice.

“You know, Minister, I disagree with Dumbledore on many counts ... but you cannot deny he’s got style. ...”